

Q A



双胎の場合、1児がIUFDであれば他児が流産になる割合はどの位でしょうか。
(東京 T.A.生)



実験のデータがありませんので文献から得られたデータをお示しします。また、胎児死亡が起こった妊娠週数、一卵性か二卵性に等によって他児が流産になる可能性は異なってくると考えられますが、この点にまで踏み込んだ報告は極めてわずかでした。妊娠初期についてみると、Landy¹⁾らは妊娠初期に二つ胎児心拍の認められた24例中15例が双胎の児を分娩し、7例は単胎分娩、1例は自然流産に終わり、1例は人工流産を行ったことを報告しています。この報告は妊娠初期に1児が子宮内胎児死亡になることはしばしばあるが、他児にまで影響が及ぶことはかなり少ない（他児が流産する確率は10%前後と考えられます）可能性を示しています。妊娠後半期になるとかなり様相が異なってきます。村上²⁾は134例の双胎分娩例のうち4例が2児とも子宮内胎児死亡し9例に1児のみの死亡がみられたことを報告しています。この9例中5例に緊急帝王切開が行われ1例のみ救命できたことを報告しています。すなわち、2児とも子宮内死亡の4例が1児が死亡してから死亡したものと考え、帝王切開の5例もいずれ胎児死亡するはずだったと考えると1児死亡の13例中9例が他の児も子宮内胎児死亡になることを示しています。なお、この報告の例はすべて2児の性が一致しておりこのことは一卵性双胎で子宮内胎児死亡が起こる可能性が高いことと、一卵性双胎で1児に胎児死亡が起こった場合は他児が引き続いて死亡する可能性が高いことを示しています。この病院が地域のセンター病院であることや他の文献なども考慮すると、双胎で1児が死亡した場合そのまま分娩まで経過をみると他児も死亡したり重篤な障害を残す可能性は20から50%程度と考えられます。妊娠前半と後半に分けて記載しました。もう一つの問題はその境界がどこにあるかですが、妊娠16週前後で分けられるのではないかと考えます。

虎の門病院産婦人科 佐藤 孝道

《参考文献》

- 1) Landy,H.J.et al.: The“vanishing twin”: Ultrasonographic assessment of fetal disappearance in the first trimester. Am.J.Obstet.Gynecol. 155 : 14, 1986.
- 2) 村上直樹：多胎にともなう胎児異常. 周産期医学, 14 : 1937, 1984.